

建築における評価 Evaluation in Architectural Education

鈴木博之
Hiroyuki Suzuki

これは建築の評価の話ではなく、建築における評価の話である。

いまから10年ほど前、ハーヴァード大学の美術史学科の学部と大学院の授業を一学期間受け持ったことがある。あちらの専任の助教授の具合が悪くなったために急に呼ばれて、いわばピンチヒッターのような役割であった。準備の時間が2、3か月しかなく、大慌てに慌てた記憶がある。私の研究室にいた、コロンビア大学からの留学生に様子を聞くと、「特に学部の授業は大変だから、止めたほうがいい」と真顔で心配された。アメリカでは学部の授業は一回60分、週に2回授業があるのがふつうだということすら知らなかったのだから、確かに無手勝流のような準備だった。

ここでは、授業の大変さと、面白さを述べるのではなく、授業の最後にあった「コース・エヴァルエーション」について述べたい。これは講義を、最後に学生たちが評価するシステムである。授業の形態も知らなかったのだから、「コース・エヴァルエーション」と言うものも全然知らなかった。最後の授業の前に、学部の事務室に寄るようにといわれた。学部の事務は学科の事務と違って、純然たる事務所である。これに対して学科の事務は家族的なオフィスで、何でも相談所兼受付兼管理人みたいなところであった。で、学部事務に出頭してみると、そこで「コース・エヴァルエーション」なるものの存在を教えられ、これからそれをやるから、道具一式もって行けといわれた。道具といってもアンケート用紙の束と、鉛筆の束を渡されるだけであるが。

そして授業が終わったところで、アンケート用紙を配付する。一緒に鉛筆も配付する。配られた鉛筆を使って、学生はアンケートに答えるのである。どうもこれは筆記用具の違いで回答者がばれることがないようにとの配慮らしかった。アンケートの内容は、教師が遅刻しなかったかとか、講義は解かりやすかったかとか、質問をきちんと受けたかとか、大きな声で講義したかとか、黒板を活用したかとか（10年前なので、講義の形式も古かったのです）、オフィスアワー（これは学生の質問や相談を受け付ける時間のこと）にちゃんと研究室にいて、親身に相談に乗ったかとか、まあ、色々なことが書いてあった。学生は5段階評価で回答し、そこに付け加えるべきことがあれば、記入するという形式だったように思う。

こうして学生が記入し終わると、私はそれを回収するのだが、回収されたアンケートは、学生のひとりに鉛筆とともに渡さなければならぬ。その学生が一式を学部事務室に届けるのである。つまりこれは、教師が回収したアンケートを改竄しないようにするための措置らしかった。

ここまでくると、なんだか他人を信用しない社会の縮図である。私の場合は、ピンチヒッターの教師なのだから、どんなに評判が悪くても、ごめんなさいで済むからいいけれど、毎回これをやられる専任教員たちはたいへんだろうなと思った。

このシステムは別のところにもあって、講義をするときのスタッフについても、勤務評定がある。これは教師の方がおこなう。美術史学科の授業であるから、毎回スライドを使ったのだが、そのスライド操作には必ずアルバイトの学生のようなひとりが付く。そのひとりがスライド操作をしてくれるのである。このスタッフの勤務状況を、最後に私が評価するのである。そんなシステムがあるということも、無論私は知らなかったから、最後の授業の少し前に、スライド係の若者が何やら緊張した面持ちでアンケート用紙を持ってきたときには面食らった。ようやく記入を終えてそれを渡したら、彼は喜び勇んでそれを持ち帰っていった。この場合は本人が持ち帰って良いシステムになっていた。これには少し自慢話になる後日譚がある。

ピンチヒッターの客員教授の任期を終えて日本に帰ってから暫くして、同僚だった先生のひとりがアンケート結果のコピーを送ってくれた。全講義の評価リストの一部分のコピーである。それには添え書きがあって、「君の授業が美術史学科では一番評判の良い授業だったヨ」と書いてあった。

確かに評点の平均数値は美術史学科の講義のなかで、私の授業が一番高いものになっていた。学生たちも親切で、お客様のような教師に対して暖かい声援を送ってくれたらしいのである。「他人を信用しない社会の縮図」と感じたのは、こちらの僻みであったらしい。

事ほど左様に、評価というものはデリケートである。ひとは評価されるときには身構える。疑心暗鬼になる。要するに天地神明に掛けて自信のあるひとなどいないのだ。日本でも最近多くなってきた授業評価では、どのようなドラマが繰り広げられているのやら。

しかし評価という作業は、講義に対して学生が行なうものだけではない。会社のなかでは人事考課が出世の決め手だといわれるし、現に

知人のなかには、ひとこと上役に楯突く発言をしたら、あっという間に地方の支店に飛ばされてしまった例がある。これまで大学は、そうした短絡的評価からは比較的自由だと考えられてきた。ゆうゆうと研究や教育にいそんでいられる自由である。

けれども最近は、そうも行かなくなってきて、さまざまな評価が行なわれるようになった。しかしながら自らを振り返ってみて、評価というもののほど不確かなものはないのではないかと思う。

大学の教師の場合、何によってその評価をするかといえば、圧倒的に「審査付き論文」の本数ということになっている。「審査付き論文」とは、しかるべき学会が関与する学術雑誌に発表される論文のことである。化学の分野などでは、年に数十編の論文を発表する先生方がいる。建築の分野は基本的に論文の数が少ない。それは分野ごとに異なるものなのだが、数字が並ぶとその多い少ないだけが目立つ。

さらに私のやっている建築史という分野は論文の数が一般的に少ない。ひとつには、建築史の論文には、あまり共著というものがなかった。文章を使って書いてゆく建築史の論文は、基本的にひとりで作業する。したがってその成果は少しずつしかまとまらない。実験を行なったり、調査を行なったりす場合には共同作業がありうるけれど、そうでなければ論文をつくる作業は孤独な執筆活動ということになる。仮に五人で書いた論文なら、五編で単著一編に相当するではないか、などというのは屁理屈にしかならず、論文数は五である。けれども筆頭著者であるかそうでないかという点で、共著論文の評価はまた微妙に異なるので、共著の論文を生産する分野も、苦勞が多いらしい。けれど業績の説明などでは、「これは筆頭著者ではないが、若いこの人が実質的には行なったものだ」、あるいは、「この論文は筆頭著者ではないけれど、この先生が指導されたもので、先生の業績である」などという言葉が出てくる。それぞれ寄与するところがあって、それぞれ業績として認められるのである。

また、「審査付き論文」以外の、「解説論文」とか「論説」といわれるものの処遇もいろいろやかましい。一般的にこれは人類の知見に新しい何物かを加える作業ではないとされて、格が落ちるとされる。商業雑誌や商業新聞などに書いた文章は、さらに品がないとされる。けれど、建築史の分野は文科系の学問に近いので、「解説論文」、「論説」、「一般誌」への寄稿が多い。これは品の悪い活動と思われるようで、必ず無視される。しかし、工学や理学と異なって、建築について考えたことは、一般の社会に対しても発表する必要があるのだ。既知の事実のもつ意味を新しく指摘する作業もまた、人類の知見になにがしかを加える作業ではあるのだ。だが、この辺が苦勞の種である。

また、「著書」の評価も低い。工学の先生は一生に数冊の本しか書かない方が多いので、それ以上書くのは品が悪いとされる。いわんや一般の本を出版している出版社からの出版では、商業活動だとしか見做されない。これも苦勞の種である。

私の恩師である太田博太郎先生も同じような苦勞をされたとみえて、むかし、よくこんな事を言っておられた。

「論文を書くのは大変である。その論文によって原稿料を取るのはさらに大変である。だから一般誌に寄稿することは大切である。一般のひとに通ずる言葉で書かなければならないからだ。」

これは正しい指摘ではないかと思っている。論文とは何かという問いとともに、発表の形式についても、つねに考えつづけなければならない。

さらに「社会的活動」といわれるものも、難しい。かつては研究者が社会的な場で活動するのは品の悪いこととされ、公務員の場合には特に「職務専念の義務」があるので、委員会の委員をしたり、社会的発言をしたりすることは好まれなかった。私の記憶では、一時学会等の委員も含めて、委員や学協会の役員に就任する最大数が制限されていた。それ以上の委員を引き受けてはならないというお達しがあった。その頃は若くて、何もそうした役目についていなかったから気楽だったが、年配の先生方は真剣に悩んでおられた。

しかしいまでは、こうした活動にも市民権が与えられるようになってきた。評価の軸も変化するのである。

特許や研究の製品化についても、最近は評価が高くなってきて、むしろ奨励されるようになってきた。「大学は基礎研究、実用化は企業」という分離は消滅しつつある。しかしこうした風潮が進むと、大学とは何なのかが改めて問題になるだろう。けれども建築史の分野では、あまり企業化するようなテーマはないので、実感が湧かない。

むしろ最近気になるのは、「国際会議招待講演」というのが高く評価されるようになってきた風潮である。これもまた、近年はこうした事例が工学系のなかで増えてきたためであろう。建築史は一種の文化論であるから、外国で講演する機会は時折ある。これは「国際会議招待講演」ということになるのだろうか。ひとりだけでしゃべるときもあれば、一種のシンポジウムであったり、連続講演会であったりすることもあるが、日本から出かけて行って最初にしゃべったり、現地のひとと公開の討議をすることになる場合が多いから、「国際会議招待講演」ということになる。

しかし、一昔前までは、これもまた無視の対象だった。どこか外国に遊びに行くような風情が漂ったものである。実際ひとりで何か国か

を講演しながら回っていれば、旅芸人のような気持ちになってくる。何をもって「国際会議招待講演」というのかは、いまだにはっきりとは理解できない。

つまりこういうことなのであろう。日本の工学部の先端的な領域の優秀な研究者が行なう行動パターンが、評価の基準になるのだ。日本の工学研究が論文中心であれば論文が、社会的活動に拡がれば社会活動が、国際的発言力が強まれば国際性が、それぞれ評価基準になる。それに伍して進めというのが評価の根底にある。

だが建築学は工学部の先端的分野の行動パターンとは、微妙にずれた行動をしてきたし、しつとある。したがって工学部全体の評価基準に対しては、どことなく居心地の悪さを感じることになる。建築史の領域はさらに工学部全体からは行動パターンがずれるので、まったく居心地が悪い。しかも悪いことに、建築学のなかにも工学部全体の行動パターンに近い分野もあるので、その分野のひとつは工学的評価基準を振りかざして建築学を統一しようとする。こうなると悲惨である。評価は大切だが、評価基準はひとつではないことを理解してもらわなければならない。しかし統一的であってこそ評価は成立するのだから、評価を重視する立場は強い。評価基準を多様化し、ある意味では無化することも必要だろう。

ここまでは評価される立場の悲哀のようなものを述べてきたので、これからは評価する立場の問題を述べてみよう。

ここでも話をアメリカの例から始めたい。アメリカの大学では、専任教師になる過程をテニユア・トラックと言うようであるが、これは6年から7年掛けて評価して、教師にテニユアを与えるシステムらしい。1年目の評価、3年目の評価、6年もしくは7年目の最終評価があるらしい。それぞれ業績を評価してゆくわけだが、される側にとってはストレスの多い時期のようである。その大学に適さないと判断された場合には、早めに通知して、他の可能性が探れるように手助けするという。専門領域が大学のポリシーとは異なってきた場合（これは本人の専門が変化した場合より、大学が必要とする専門を変更する場合が多いようにも思える）、その専門を求める他の大学に移るということになるらしい。研究と教育の両面から業績が評価されることは無論である。

こうした評価を経てきた教授たちに聞くと、評価は業績次第で決まるというが、若い先生などに聞くと、人間関係が大事だといった見方をする場合もある。外部のものにはよく解からない部分もある。著作、論文、研究プロジェクトの補助金受給の実績、受賞歴などは大事らしい。研究領域の幅の広さも大事らしい。また、人文系の先生から、教授になるには著作2冊は必要だという話も聞いた。1冊の著作だけではその人の専門領域の広さや、ものの見方の安定した実力が解からないというのだ。

ここでアメリカにおける研究書の出版の一般的プロセスとして聞いた話を述べておこう。建築史や美術史で研究を行なって、あるまとまった論文ができるのと研究会などで発表する。討論の過程で批判を受け入れて改訂原稿を作り、別の研究会や講演会で発表する。こうして完成原稿ができる。それを専門学会誌に掲載することもあれば、そのまま完成原稿として貯めておくこともある。このような論文が何編か集まると、それを大学出版局から出版するのである。論文集などに寄稿した論文もここに含めて、1冊の著作にするわけである。無論、そこでは統一したテーマが多面的に展開されている必要がある。こういう著作2冊が、教授資格というわけである。ここでアメリカの出版事情を聞きかじりで述べると、アメリカにはいわゆる総合雑誌というものがないので、一般雑誌に論文やエッセイを発表することができない。シンポジウムや研究会がそれだけ重要度を増す。

また、出版物は報告書の形で出したのではあまり価値がなく、きちんと出版社（それも名の通った大学の出版局）から出すのがよいとのことだった。これらは一部の世界の事情を伝えるものに過ぎないけれど、こういう世界もあるという話である。また、大家になってしまえば、自由に執筆活動を行なって、自由に見解を発表することができるようになる。こうなってから、それまでは言えなかった物の見方を妥協なく主張するようになる例もあるらしく、そういうのをテニユアード・ラジカル（テニユアを取って、それから安心して急進的になる）というのだという話も聞いた。本当かどうかは知らないが。

このような事を書いていると、結局は評価する話ではなく、評価される話になってしまう。評価の問題のむずかしさはここにありそうである。いつも人は評価という軸にそって振り回される。「評価の軸は自分が作る」と、自信满满でこの問題を考えられるほど夜郎自大な人物はいないだろう。それとも、そうした自信に溢れた人物は意外に多いのかもしれない。しかし、少なくとも私はそうなれない。

評価に対処する方法はどのようなものか。それは評価をすり抜ける自在さを獲得することであろう。組織として評価を受けなければならないとき、また何かのプロジェクトを立ち上げてその評価を受けなければならないときなどは、とりわけこのことを心掛けるべきではないか。一人きりでやってゆくなら、テニユアード・ラジカルで好きなことを非妥協的に行なうのもよいが、組織として、あるいは外部からの

資金を導入してのプロジェクトを組む場合には、評価を避けるわけにも行かない。その際に問題になるのが、評価軸とその組織との関係である。評価軸を無視する、評価軸に迎合する、評価軸に鈍感でいる、といった3種類の対処の仕方は、それぞれ問題があろう。評価軸を無視してやってゆけるなら、最初から評価など問題にならない。評価軸に迎合するのは賢明な対処法であることも多いが、その結果、自分たちの組織のアイデンティティがあやふやになってしまうこともある。何のために自分たちが存在しているのかが、本末転倒してしまいかねないのが、怖いところである。かといって評価軸に鈍感であっても、世の中から取り残されかねない。そこで考えられるのが、評価軸と自己の両立のための手法である。話を大きくしてしまえば、評価軸の根源には国家がある。国立機関に対する外部評価の視点は国家の目であるし、教育や科学技術に関する評価も、国家の目をもって行なわれている。とすれば、評価軸と自己の両立とは、国家と自己との両立である。そんなことは当たり前だと考える人は、評価軸をひたすら信じて、自己をそこに同一化すればよい。

けれども、科学技術や教育は、国家よりも長いスパンをもつ。国家の価値観に焦点を合わせた科学技術や教育が、十分な有効性と妥当性を持ちつづけるとは限らない。

第二次世界大戦以前からの論客に、徳富蘇峰という人物がいた。彼は明治後半から国家のイデオログとして健筆を振るい、文化勲章を与えられた。しかし戦後、彼は自らが護持した国家観が崩壊したのを目にして、文化勲章を拝辞した。そして「500年後を見よ」と言って死んだ。彼が死んでからまだ半世紀ほどしか経っていないから、彼の正当性を検証するためには、あと450年近く待たねばならないらしいが、彼の姿は評価ということを考えるときには、必ず頭に浮かぶ。

また、同じような時代を生きた政治学者に、岡義武と矢部貞治というふたりの東大教授がいる。矢部は海軍と近く、近衛文麿のブレーンとしても積極的に戦争中の政治に参加した。戦後は東大を辞して近衛文麿の伝記を著し、拓殖大学の学長を務めたりした。一方岡は現実の政治に介入することは少なく、戦後も東大に残り、山県有朋や近衛文麿の評伝を岩波新書で出版したりして、文化勲章を受けた。一般的にはいまでは岡の評価が高く、緒方貞子なども彼を師と仰いでいる。しかしこのふたりの生き方も、単純にどちらが良かったと決められるものではないし、同時代の評価は矢部の方が高かったようである。

建築の世界で評価という事を考えると、自己と国家意識をもっとも合一できた人物として、佐野利器という人物が思い浮かぶ。彼は日本の建築の耐震構造を確立し、さらには都市整備における区画整理事業の推進と建築不燃化に邁進した。彼の生涯の軌跡は、建築と国家意志との結合を目指す情熱に満ち満ちている。こうした人物の評価は、その活動範囲が大きすぎることもあって、現在もなお十分には行なわれていない。しかしながら彼の意識の広さと大きさと、その影響範囲の全貌を把握したうえで、どのような評価が下されるべきかは、それぞれ評価者の立場によって異なるであろう。

誰が正しかったかの評価など、単純にはできないのである。評価をすり抜ける自在さとは、評価を誤魔化すことではないし、評価に媚びることでもない。評価に縛られ過ぎない自由を保持しつづけることである。自己と評価軸との間の乖離を意識化したうえで、評価に対処するといったらよいのだろうか。そこに、評価に振り回されずに自己を保ちつづける立場が築ける。組織として評価に対処しなければならないとき、こうした相対化の意識は不可欠であろうと思う。また、プロジェクトをアピールする際の視点としても、こうした余裕は必要であろう。

時代が評価を重視するようになり、格付けが方々で行なわれるようになってくる時、われわれは評価そのものもつ政治性（国家は不可視であるが、それが可視化されたものが政治である）を十分に理解しておくことが必要であろう。